

■ 肢体不自由のある子どもへの実践事例

マルチメディアDAISY図書を活用することで、 どんなときも楽しめる読書活動

横浜市立中村特別支援学校
関戸 優紀子

はじめに

本校は、1982年4月に中村養護学校として、中村小学校と併設する形で開校しました。現在では、小学部34名（うち訪問籍3名）、中学部20名（うち訪問籍1名）、高等部21名（うち訪問籍2名）の計75名の児童・生徒が在籍しています。

また、今年の6月には横浜医療福祉センター港南の中に分教室が開級しました。平成28年11月現在、分教室には4名の児童・生徒が在籍しています。

本校の近くには、横浜市立大学附属病院や地域活動ホームがあります。本校に通う子どもたちの障害の状態は、近年多様化しています。教育課程は自立活動の子どもがほとんどですが、知的代替、準ずる教育を行う子どもも在籍しています。興味・関心の幅を広げたい子どもの他に、言葉の習得を目指す子どもも近年増えてきました。中村小学校と併設されている本校にとって、学校間の交流は、たいへん重要な教育と考え、積極的に行っています。交流によって、本校の子どもたちが受ける

影響は大きなものがありますが、中村小学校の子どもたちに与える影響は、より大きなものがあります。ドア1枚で学校がつながっているの、日常的に学校間の行き来が自由にあります。小学生が昼休みに本校の子どもたちにリコーダーの演奏を聞かせてくれたり、本の読み聞かせをしてくれたりすることもあります。運動会や避難訓練などの行事も合同で行います。また、教員間の交流も活発に行っています。

活用事例

・ 中学部2年生女子A

実態としては、3年前より昼休みを中心に、iPadのアプリ「ボイスオブデイジー」を使用してわいわい文庫の本を楽しんで読んできました。昨年度からは給食が終わると、早く本読みをしたくて、最初のうちは教員を目で追って訴えていましたが、わいわい文庫への興味・関心の高さを利用し、発声でコミュニケーションをとることができるようになりました。

具体的には、本読みがしたいときは

「ラララ～」と大きな声で周りの人に伝えられるようになりました。Aさんが「ラララ～」と言うと、近くにいる教員が期待感いっぱいのAさんの熱い視線を感じながら、iPadを設置しアプリを起動させます。

3年前は、好きな本以外は拒否感が強かったのですが、昨年度途中から教員が勧める長めのストーリー性のある本も受け入れられるようになってきました。

そして、今年度は、日本語と英語で交互に読まれるという『よかったねネッドくん』を真剣な表情で見て聞き、物語が終わると、次の本を要求するため「ラララ～」と言います。そして、教員が数冊の本のタイトルを言うと、タイミング良く発声で返事をして選ぶことができるようになりました。ちなみにAさんが大好きな本は、『ことことこと』、『パパンがパン』、『べったん！ サンドイッチ』です。

読書の際の姿勢について

毎日楽しい昼休みを過ごしているAさんですが、側腕の手術のため、1か月近く学校を休みました。術後は腰をひねったり、反ったりすることが禁忌事項となりました。今までは、肘立て位の姿勢で本読みをしていましたが、術後はできなくなり、昼休みの本読みに関しては、仰臥位の姿勢のみで行っ

ています。仰臥位での本読みをするときには、昨年度に引き続き、iPadを丸椅子やカゴ、折りたたみの机などにアームを固定して、教室内のどこの場所でも使えるようにしました。

しかし、昼休みは他の生徒にとっても楽しく充実した時間にすべきで、手膝這いや肘這いで自由に教室を移動することを楽しみにしている生徒もいます。昨年度のクラスと今年のクラスでは、教室にいる子どもたちの人数が違うことや、動きのある生徒の数が違い、昨年度は危ないことのなかった丸椅子などでの固定は危険を伴う場面がでてきました。そこで、作りつけの棚にアームを固定し、そこに臥位になることにしました。

しかし、その場所を他の生徒が使いたいこともあり、アームが固定しやすい場所に常に臥位になることができないこともあります。毎日本読みを楽しみにしているAさんですから、環境が整わないからといってやめることは考えられませんし、かといって安全に取り組めない方法を行うことはできません。困ったことになりました。

見る読書だけでなく、聞く読書を試してみる

Aさんは毎日の昼休みの読書3年目で、本当に毎日昼休みのこの時間を楽しみにしています。本読みの最

中はじっと画面を食い入るように見えています。

そこでiPadの画面を安全に見えるようにすることを一番に考えましたが、わいわい文庫はバリアフリー読書を掲げていますから、発想を変えてみることにしました。

見る読書から聞く読書を試してみることにしたのです。映像がないことを受け入れにくいのではないかと予測していたのですが、実際は最初から受け入れが良かったです。まず仰臥位になったAさんの頭の上の見えない場所にiPadを置きました。

頭の上側で教員がiPadを操作するため、そこにあることに気がつき、Aさんは何とかしてiPadが見えないものかというように、頭と背中を反らすような動きが出ました。

そこで、足の下側に置くことに変更しました。操作に関しては本人から全く見えない場所なので、気にされることもなく、教員は操作をしやすかったのですが、昼休みで賑やかな教室であることから足側では音声が聞こえにくくなりました。(写真1・2)

聞こえにくいという不満の声があったので、Bluetoothで接続したスピーカーを使用し、iPadは本人の足の下側に、スピーカーは頭の近くに置いてみました。不満気な声がなくなりました。(写真3)



写真1



写真2



写真3

数回繰り返して聞く読書に取り組むことで、iPadが見えなくてもスピーカーから聞こえる本読みが終わると、いままでのように表情良く教員に「ラララ～」と発声で、次の本を要求することもできました。

間の時間を設定してみる

昨年度は、大好きな『パパンがパン』でこんな活動をしました。「あなたはだあれ？」や「パパンがパン」のセリフが大好きで、よく観察していると、このセリフの少し前から手足を激しく動かして期待している様子がわかりました。

そこで、間の時間を1.5秒に設定してみました。すると「くるぞ！」と期待感が強まり、いつも以上に画面を食い入るように見ながら楽しんで聞いていました。思い切って3秒に設定するとさらに楽しさが倍増していました。間が3秒もあると、まさに間延びした感じになってしまいますが、この生徒にとっては、非常に満足感を得た読書活動になりました。

今回は、聞く読書ではどうだろうと思い、同じように間の設定をさまざまな秒数にして試してみました。現在の一番のお気に入り『ぺったん！ サンドイッチ』ですので、そちらの本で試してみました。

この本で一番好きなセリフは「さい

ごに もうひとつ とくべつの サンドイッチ おとうさん おかあさん ちょっと てを かして はさむよー」というセリフです。このセリフの前は昨年度の『パパンがパン』で試した時と同じように期待感を表情や身体の動きで表します。

まず、見る読書で一番楽しんでいたら3秒の設定にしてみました。すると、映像が見えないので、「止められてしまったのではないか」というかのように不安な表情になりました。3秒後に次のセリフがくると、ホッとした表情になり、しかしまたすぐに不安に……というように、楽しめている様子は見られませんでした。

つぎに2秒の設定にしてみました。3秒の時ほどではありませんが、まだ楽しむ様子はありません。そして、1秒の設定にしてみました。すると、終わりまでずっと表情が良いまま聞いていたのです。

むしろ、間はない方が良いのかもしれないと思い、0秒でも試しました。しかし、0秒では1秒ほどの表情はでませんでした。やはり、「くるぞ！ くるぞ！」という期待感にはわずかでも間が必要なのだと感じました。

おわりに

今回は手術をして身体に大きな変化があり、動きの制限があるAさんの事

例を取り上げました。3年前からおもに昼休みに行ってきた本読みですが、聞く読書ができることで、Aさんは今までより読書活動の機会が増える可能性がでてきたと思います。

映像を見せる環境がない場面や身体の動きの制限がある中でも、スピーカーやヘッドフォンを使用して聞くことができます。

たとえば、給食前の待ち時間や短い休み時間などです。給食や授業前は、机の上にiPadがあると準備ができま

せん。しかし、スピーカーやヘッドフォンを使用すれば、教員はスムーズに準備をすることができますし、Aさんは待ち時間が読書活動の時間になります。今後も聞く読書も併用しながら読書活動を通じて、Aさんの楽しみを増やしていきたいと思います。

また、Aさんのようにわいわい文庫を通じて、学習につなげていける子どもたちはたくさんいると思います。利用者、利用率をあげるべく、普及することも大切になると考えます。

